

JSPSボン研究連絡センター 2011 年度第 1 四半期活動報告 (2011 年 4 月～6 月)

< 目 次 >

1 2011 年 4～6 月の主な活動	…p 1
(1)第 16 回日独学術シンポジウム開催	
(2) 8 大学での「日本週間」関連行事に参加	
(3)チューリヒ大学日本学新講座開設記念シンポジウム「Japan Swiss Made」 に出席	
(4) JSPS サマープログラム プレオリエンテーション開催	
(5) ボン大学主催留学フェアに参加	
(6) ドイツ大学長会議(HRK)セミナー「学生の多様性を生かすー大学の 挑戦」に出席	
(7) ベルリン日独センター主催シンポジウム「環境と資源の持続可能性および 長期的災害対策に関する日独協力」に出席	
(8) アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)年次総会出席	
2 会議、イベントへの出席、当センターへの来訪者等一覧	…p 17
3 2011 年 7 月以降の予定	…p 18
4 センター長雑感	…p 19

1 2011 年 4～6 月の主な活動

(1)第 16 回日独学術シンポジウム“Japan-German Science Cooperation: Past-Present-Future”開催

日時: 2011 年 5 月 20 日～21 日

場所:ベルリンブランデンブルク学術アカデミー ライプニッツホール(ベルリン市)

当センターでは例年、JSPS ドイツ同窓会と共催で「日独学術シンポジウム」を開催しており、今回で 16 回目となる(第 15 回のみ日独仏合同シンポジウムとし、JSPS ストラスブール研究連絡センター、JSPS フランス同窓会とも共催)。2011 年は「日独交流 150 周年」の節目の年に当たることから、これまでの日独学術交流を振り返り、未来を展望するという意味で、テーマを“Japan-German Science Cooperation: Past-Present-Future”(日独学術協力ー過去・現在・未来ー)とした。ドイツにおける JSPS の対応機関のひとつである DFG(ドイツ研究振興協会)とも共催、在ドイツ日本国大使館からの協力もいただき、例年よりも規模を拡大して開催した。5 月 20、21 日ともに、250 名程度が参加した。

本シンポジウムは、大きく分けて、

- ①挨拶及びノーベル賞受賞者の基調講演等から成る式典セッション
- ②東日本大震災に関する特別セッション
- ③人文・社会科学、生命科学、自然科学それぞれの講演から成る学術セッション

の 3 部構成となっており、セッション毎に以下に報告する。

①式典セッション

開会にあたり、神余隆博 在ドイツ日本国大使、小林誠 JSPS 理事、マティアス・クライナー DFG 会長、ハインリヒ・メンクハウス JSPSドイツ同窓会長(明治大学教授)から挨拶をいただいた。4 氏それぞれの立場から、日独交流 150 周年を祝うと同時に、東日本大震災への言及と今後の協力促進を願う挨拶であった。

続いて、日独ノーベル賞受賞者による基調講演、日独若手研究者及び歴史回顧的な講演に移った。

基調講演の前に、クライナー DFG 会長よりノーベル賞受賞者の紹介が行われた。日本側ノーベル賞受賞者として、小林誠 JSPS 理事から、日独協働に始まった日本の高エネルギー粒子加速実験の歴史を追いながら、小林理事の CP 対称性の破れに端を発したクォーク理論発見に至る研究紹介があった。次いでドイツ側ノーベル賞受賞者としてクラウス・フォン クリツィング教授(マックスプランク協会固体研究所長)から、重量原器にまつわるエピソードとともに、自然定数を用いて重量単位を定義すること、そのために重要な役割を果たすプランク定数が効くという、同教授が発見したホール効果の話が紹介された。フォン クリツィング教授はノーベル賞受賞前後に日本に滞在していたことがあったとのことで、日本での経験等もユーモアを交えて紹介していた。



小林誠 JSPS 理事



クラウス・フォン クリツィング教授

若手研究者としては、日本側から建築家の西沢立衛氏(横浜国立大学教授)が、自身の手がけたスイス連邦工科大学ローザンヌ校の施設の紹介を通して建築設計思想にも言及し、ドイツ側からはシャリテ(ベルリンの大学病院)で分子生物学を研究するマルクス・ベヒ博士より、タンパク発現に関する最先端研究の紹介があった。続く石井紫郎東京大学名誉教授(JSPS 学術システム研究センター相談役)

による、日独修好通商条約締結後のプロイセン文化制度移入に関する講演により、開会挨拶に始まる式典セッションは結ばれた。



西沢立衛教授



マルクス・ベヒ博士



石井紫郎東京大学名誉教授



会場内

②特別セッション

コーヒープレイクを挟んで、東日本大震災に関する特別セッションに移った。被災者に対して黙とうがさげられた後、三好真理 在ドイツ日本大使館公使から、日本の全般的状況の紹介と課題の克服に向けての期待が述べられ、次いで、震災時に東海村 J-PARC (大強度陽子加速器施設) で勤務中だったドイツ人研究者アレクサンダー・シュナーゼ博士から、被災当時の体験、建設中の加速器の被災状況、生活環境変化、などについて現場からの報告があり、最後に放射線医学の専門家である連邦国防軍放射線生物学研究所のヴィクトル・マイネケ教授から、福島第一原発事故による放射能汚染についての客観的な科学的解説があった。全体として冷静に事態を受け止め対処しようという空気で、特別セッションは結ばれた。



三好真理公使



アレクサンダー・シュナーゼ博士



ヴィクトル・マイネケ教授

③学術セッション

翌 21 日より、学術セッションに入った。

学術セッションの第1部(人文・社会科学)は石田勇治 東京大学教授によるジェノサイドに関する研究発表で、日独の関心が集まる中、現代のジェノサイド現象の多くが、近代文明の発展に起因するとの分析が紹介された。



石田勇治教授

第2部(生命科学)では、田中求 ハイデルベルク大学教授が細胞膜接着を生物物理的に研究した成果と、それをマラリア病制御やバイオ電子回路設計に応用しようとする意欲的な構想を、田中教授が日独協働に関わった経歴と合わせて紹介された。続いてマックスプランク協会分子生理学研究所のヘルベルト・ヴァルトマン教授が、主要化学分子の構造の周期性を調べる研究の奥深さを解説し、物質分子の不思議と研究の面白さを説いた。



田中求教授



ヘルベルト・ヴァルトマン教授

第 3 部(自然科学)では、東信彦 長岡技術科学大学教授が極圏でのアイス・コア掘削・実験観測隊の歴史を紹介し、日独協力の成果や、コア解析から判明した地球環境の 70 万年を超える長期変動を報告した。最後の講演として、ハイデルベルク理論学研究所のフォルカー・シュプリングエル教授が、ビッグバンに始まり、宇宙膨張の中で大規模構造が発現するシミュレーション動画を紹介し、ダークマター、ダークエネルギーの正体を探る試みについても言及した。



東信彦教授



フォルカー・シュプリングエル教授

いずれの講演も高い関心を呼び、質疑応答が時間内に収まらず、議論の多くは休憩時間や食事時間に持ち越された。講演の組み合わせ、講演の水準ともに、参加者からは高い評価が得られた。なお、学術セッションの第1部(人文・社会)で日独学術交流史について講演予定であった講師1名が、東日本大震災の影響で残念ながら参加取りやめとなり、ここにも震災の影響が表れた。

本シンポジウムのプログラム及び講演で使われた資料(講演者の同意を得られたもののみ)は、当センターのホームページ(<http://www.jsps-bonn.de/index.php?id=1343>)に掲載している。

21 日午後には JSPS ドイツ同窓会により、ベルリン市内のスタディーツアー及び JSPS ドイツ同窓会の年次総会が行われた。スタディーツアーは、森鷗外記念館見学を中心としたベルリン市内の日本にゆかりのある場所への訪問と、ロベルト・コッホが結核菌を発見したことでも有名なシャリテール見学の 2 つに分かれて行われた。また、JSPS ドイツ同窓会は、シンポジウム前までの会員数は 296 名であったが、このシンポジウム期間に、会員数が 300 名を超えるに至った。

シンポジウム開始前の 20 日午前には、DFG による「オイゲン・ウント・イルゼ・ザイボルト賞」(Eugen und Ilse Seibold-Preise、以下「ザイボルト賞」)授賞式も行われた。ザイボルト賞は、優れた研究業績を有し、かつ、長年にわたって日独学術交流に貢献した研究者に授与されるもので、元 DFG 会長のオイゲン・ザイボルト氏(在任期間 1980-1985)とイルゼ夫人からの寄付を基に始められた。この賞は 2 年ごとに日独 1 名ずつの研究者に対して授与が行われ、今回で第 8 回目となる。

今回のザイボルト賞受賞者は、巽和行 名古屋大学物質科学国際研究センター教授とゲルハルト・エルカー ミュンスター大学教授であり、両教授は JSPS の日独共同大学院プログラムの支援(ミュンスター大学には DFG が IRTG(International Research Training Group) プログラムにより支援)の下に実施している「複雑系機能物質の化学に関する共同指導プログラム」の日独それぞれの代表を務めている研究者である。両教授にはシンポジウムにもご出席いただき、式典セッションでの記念講演の司会を務めていただいた。



左からエルカー教授、クライナー DFG 会長、巽教授



< 関連 URL >

本シンポジウムのプログラム及び講演資料 <http://www.jsps-bonn.de/index.php?id=1343>

ザイボルト賞 http://www.dfg.de/en/service/press/press_releases/2011/press_release_no.11/index.html
<http://www.nagoya-u.ac.jp/research/activities/achieve/20110408.html>

会場 http://veranstaltungszenrum.bbaw.de/veranstaltungszenrum/en/conference_centre

(2) 8 大学での「日本週間」関連行事に参加

2011 年 4 月から 12 月にかけて、ドイツの 18 の大学で「日本週間」が開催されている。「日本週間」は日本の大学との協力関係を深めたり、日本への留学や研究滞在を促進する大学のプロジェクトを支援するもので、2010 年秋に公募が行われ、18 の大学が採択された(内 7 校が JSPS ボン研究連絡センターの所在するノルトライン・ヴェストファーレン州内の大学)。「日本週間」は連邦教育研究省(BMBF)が日独交流 150 周年記念年に合わせて予算を用意し、ドイツ大学長会議(HRK)が運営している。

HRK HP http://www.hrk.de/de/hrk_international/hrk_international_5744.php

当センターではすでに 8 大学の日本週間に参加し(内 1 大学は資料のみの参加)、秋に 2 大学に参加予定であるが、当センターがこれまでに参加したものについて、以下に報告する。

①ハンブルク大学での「日本週間」オープニングシンポジウム(4月13日～4月14日)

4月12日から4月14日にかけて、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所にて「日本週間」オープニングシンポジウムが開催され、中川副センター長と Albers 職員が4月13日、14日に参加し、JSPSの紹介ブースを設置した。

13日は「学問と社会」「学問と経済」等といったテーマで大学教員等の専門家によるパネルディスカッションが行われたが、日本学専攻の学生を中心に多くの参加者が集まり、200人程度を収容する会場に立ち見が出るほどの盛況であった。主催者である HRK の表現を借りると、「ドイツにおける関心は大きく、オープニングイベントに対して喜ばしい反響も寄せられた。」14日は日独交流に関連した職業に従事している6名の方(全員ドイツ人)による体験発表や学生との対話が、3つの部屋に分かれ、休憩を挟む2部構成で行われた。この日も前日と同程度の参加があった。ドイツでは大学の専攻と関連する職業への就職が一般的であることもあり、非常に活発な質疑応答が行われていた。

<関連 URL>

http://www.hrk.de/de/hrk_international/hrk_international_5744.php

http://www.aai.uni-hamburg.de/japanwochen/KonferenzWissenschaften_ip.pdf(日本語)



13日のパネルディスカッション



14日の職業についての体験発表や学生との対話



情報ブース設置会場



JSPS 紹介ブース(左から Albers 職員、中川副センター長)

② ヴッペルタール大学(5 月 2-4 日)

5 月 2 日から 5 月 4 日にかけて、ヴッペルタール大学にて「日本週間」が開催され、中川副センター長、Schulze 職員、坂本国際協力員が 5 月 3 日に参加した。JSPS 紹介ブースを出展し、中川副センター長が JSPS 事業及び渡日のための奨学金等を紹介する講演を行った。

ヴッペルタール大学には、日本のいくつかの大学(お茶の水女子大学、静岡大学、大阪府立大学等)と協定を結んでいる。

JSPS 紹介ブースは、学生食堂のある建物の入り口近くに設置され、多くの学生が通る場所ではあったものの、残念ながらブースに立ち寄る学生は少なかった。しかし、立ち寄った学生は、日本について強い関心を持っており、熱心に質問して多くのパンフレットを持ち帰っていた。

中川副センター長による JSPS 事業紹介の講演は、紹介ブースの設置場所とは違う建物で、30 分間の持ち時間で行われた。参加者は 20 名程度であったが、質疑応答の時間では日本での研究滞在を前提とした具体的な質問が多く、持ち時間終了後も引き続き、質問してきた参加者もいた。

JSPS 事業紹介の講演の前後には、日本の文化や生活習慣等の紹介、日本の大学とどのような研究交流を行っているかについての講演も行われていた。

ヴッペルタール大学には日本学に関する学部、学科は設置されていないため、参加者数は少なく、イベントの規模も小規模であったが、会場に足を運んでいる研究者や学生は強い関心を持っている様子がうかがえた。



中川副センター長による JSPS 事業紹介

③オスナブリュック専門大学 (5 月 2-6 日)

「日本週間」では大学で関連行事が行われるというのが一般的であるが、オスナブリュック専門大学ではその他に、日本関連企業や施設を訪問する学生のためにバスツアーを企画した。同専門大学のアンドレアス・フレイ教授より、当センターを訪問したい旨の依頼があり、5 月 5 日にフレイ教授が引率する 20 名の学生の訪問を受けた。当センターの会議室には入りきらないため、当センター向かいの学術センターの会議室を借り、訪問団を受け入れた。

事前にフレイ教授より、訪問する学生は国際ビジネス経営を専攻する学部学生で、日本については興味があるものの、まだ日本のことを詳しく知っているわけではないと聞いていたため、小平センター長からまず、日本の文化や生活、大学における研究等について、入門的な説明を行った。続いて中川副センター長から、JSPS のフェローシップ及び学部学生が申し込むことができる日本の奨学金等の説明を行い、坂本国際協力員からは日本の MOT(技術経営専攻の大学院)に関するプレゼンテーションを行った。

<関連 URL>

http://www.hs-osnabrueck.de/uploads/media/Programm_Japan_Woche_Stand_Mai_2.pdf



小平センター長



中川副センター長



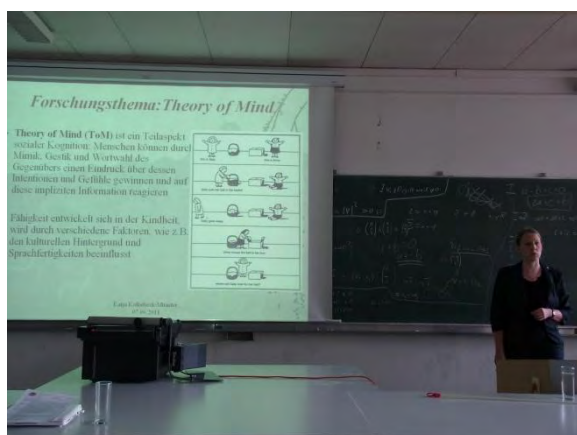
会場の様子



坂本国際協力員

④ビーレフェルト大学（6 月 6-10 日）

ビーレフェルト大学の「日本週間」には、中川副センター長、Schulze 職員が参加し、中川副センター長が JSPS 事業及び渡日のための奨学金等を紹介する講演をし、それに続いて元 JSPS フェローで現在ミュンスター大学に勤務しているカティア・ケルケベック(Katja Kölkebeck)博士に JSPS プログラムで京都大学に研究滞在した際の体験発表をしていただいた。日本の機関からは、当センターの他に筑波大学ボン事務所が参加しており、相澤啓一教授が筑波大学及びグローバル 30 を説明する講演をしていた。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)とDFGからも参加があり、それぞれの機関の渡日プログラムや日本との共同研究支援プログラム等を紹介していた。



元 JSPS フェロー カティア・ケルケベック博士



筑波大学 相澤啓一教授

⑤フライブルク大学（6 月 8-10 日）

フライブルク大学の「日本週間」には、中川副センター長、Albers 職員が参加し、情報ブースを設置し、中川副センター長が JSPS 事業及び渡日のための奨学金等の紹介する講演をした。それに続いて元 JSPS フェローで現在フライブルク大学に勤務しているクリスティアン・ベッカー-アサノ(Christian Becker-Asano)博士に JSPS プログラムで京都に研究滞在した際の体験発表をしていただいた。

フライブルク大学は名古屋大学と協定を締結しており、名古屋大学は 2010 年からフライブルク大学内にヨーロッパセンターを設置している。そのためこの「日本週間」は、フライブルク大学と名古屋大学との共催で開催され、日本からも名古屋大学の関係教職員、立命館大学教員も参加し、JSPS ドイツ同窓会、DFG、国際交流基金ケルン文化会館等も参加していた。



会場の様子(講演者はクリスティアン・ベッカー-アサノ博士)

⑥ケルン大学(6 月 22 日)

ケルン大学の「日本週間」には、中川副センター長、Schulze 職員が参加し、中川副センター長が JSPS 事業及び渡日のための奨学金等を紹介する講演をし、それに続いて元 JSPS フェローで現在フライブルク大学に勤務しているクリスティアン・ベッカー-アサノ(Christian Becker-Asano)博士に JSPS プログラムで京都に研究滞在した際の体験発表をしていただいた。ケルン大学には日本学部があり、日本学部の学生を中心に 35 名程度が参加していた。ケルン大学の国際課及び DAAD(ドイツ学術交流会)担当者から、ドイツ人学生向けの渡日のための奨学金及びプログラムを説明する講演に続いて中川副センター長の講演が行われ、参加した学生が実用的な情報を得るためには良いプログラム構成となっていた。中川副センター長から講演後に、JSPS が作成している「Life in Japan for foreign researchers」等、当センターから持参した資料について説明したところ、資料の前には多くの学生が集まり、持参した資料は足りなくなるほどであった。



元 JSPS フェロー クリスティアン・ベッカー-アサノ博士

⑦ハレ・ヴィッテンベルク大学 (6 月 29 日-7 月 1 日)

ハレ・ヴィッテンベルク大学の日本週間には、小平センター長と中川副センター長が参加した。

6 月 29 日には、在ドイツ日本国大使館 岡田憲治公使及び連邦政府、州政府からの挨拶もあり、大学関係者、学生等 200 名以上を集めて開会式が盛大に開催された。挨拶に続いて、同大の「日本週間」の代表を務めるゲジーネ・フォルヤンティ-ヨスト(Gesine Foljantey-Jost)副学長(政治学・日本学研究所教授)の講演を含む 3 つの学術講演が行われた。会場に集まっていた日本学を専攻する学生たちは、左胸に「日本学」というロゴの入ったおそろいの黒い T シャツを着ていた。

ちょうどこの機会に、同大と独協大学が大学間協定を締結することになり、開会式に続いて関係者の立ち会いの下に、大学間協定調印式が行われた。

翌 30 日は、医学・薬学系、自然科学系のキャンパス内にある薬学部の講堂に会場を移し、午前は薬学に関する日独シンポジウムが開催され、午後は「日本における研究と博士号取得」と題したパネルディスカッションが行われ、小平センター長がパネラーとして参加した。自然科学系専攻の大学院生と思われる学生を中心に 40 名程度の聴衆が集まり、会場は日本学関係のキャンパスから離れていたが、日本学専攻の学生も 5 名程度来場していた。パネルディスカッション後には、小平センター長のもとに多くの参加者が集まり、小平センター長と中川副センター長にて対応した。30 分程度対応し、その後も質問は尽きなかったが、会場の時間の制約で残念ながらそれ以上の質問に答えることができなかった。



開会式の様子



ゲジネ・フォルマンティヨスト副学長による講演



ハレ・ヴィッテンベルク大学と独協大学との協定調印式



パネルディスカッションの様子(左から2人目が小平センター長)

(3)チューリヒ大学日本学新講座開設記念シンポジウム「Japan Swiss Made」に出席

日時: 2011 年 4 月 27 日

場所:チューリヒ大学(スイス チューリヒ市)

小平センター長と中川副センター長が、チューリヒ大学日本学新講座開設記念シンポジウム「Japan Swiss Made」に出席した。これは、スイス メルカトル財団がチューリヒ大学に対して、2010 年から2015 年の間に社会学分野の日本学講座を開設するために 300 万フランを支援し、チューリヒ大学で博士号を取得した Dr. David Chiavacci(ダヴィッデ キアヴァッチ博士 1971 年生まれ)が 2010 年より担当教授に就任したことを記念して開かれたものである。大学、財団、日本関係者等、100 名程度が出席していた。

開会にあたり、チューリヒ大学 Andreas Fischer 学長、スイス メルカトル財団 Albert Kesseli 事務局長、在スイス日本国大使館 深川康公使が挨拶をした。続いて、キアヴァッチ教授による「スイスと西側における日本に対する認識—その変遷と傾向」と題した講演が行われ、その後キアヴァッチ教授と深川公使、日本学研究者等によるパネルディスカッションが行われた。

スイス メルカトル財団は、学術と教育の強化、子どもと青少年の支援に重点を置く公益の助成財団である。

< 関連 URL >

チューリヒ大学 HP http://www.ostasien.uzh.ch/japanologie_ja.html (日本語)

スイス メルカトル財団 HP http://cms.stiftung-mercator.ch/cms/front_content.php

(4) JSPS サマープログラム プレオリエンテーション開催

日時: 2011 年 5 月 6 日

場所: グスタフ・シュトレゼマン会議場(ボン市)

ボン研究連絡センターでは、JSPS サマープログラムに採用された渡日間近の若手研究者に対し、日本での研究を有意義に開始してもらうとともに、親睦を深めてもらうことを目的としたオリエンテーションをボンで毎年開催している。本年度は東日本大震災の影響もあり、数名の辞退があり、オリエンテーションの参加者数は7 名であった(採用者14名(内1名繰り上げ採用)、サマープログラム参加者は最終的に9 名)。

当日は小平センター長の挨拶で始まり、続いてサマープログラムの申請窓口となっているドイツ学術交流会(DAAD)のKarin Möller氏が挨拶をし、DAADの日独交流事業についての説明があった。その後、各参加者の自己紹介、中川副センター長からのサマープログラム参加後に申請できるJSPSフェローシップの紹介、JSPS本部でサマープログラムを担当している山岡寧子係長からのサマープログラム参加についての説明と続いた。集合写真撮影とコーヒープレイクをはさみ、昨年度のサマープログラム参加者クリスティーナ・ツィーマーマン(Christina Zimmermann)氏、ジモーネ・ハメラ(Simone Hamerla)氏 による体験発表及び質疑応答が行われた。体験発表では、日本での研究やその成果、日本生活における秘訣、日本での文化体験等について紹介された。続いて、JSPSドイツ同窓会役員ザビーネ・ガンター-リヒター(Sabine Ganter-Richter)氏から同窓会の紹介があり、最後に、ドイツでは東日本大震災と原発事故について過剰な報道等がされていたこともあり、渡日前に必要以上に心配をしないよう、小平センター長から原発事故等について具体的な数値に基づいた危険レベルに関する説明とこれに対する質疑応答が行われた。

2010 年 11 月 5 日に当センターはフライブルク大学で JSPS 事業紹介を行ったが、今回サマープログラムに採用された内の 2 名は、その事業紹介によりサマープログラムのことを知り、申請したとのことであった。当センターとしては、ドイツの大学等にて引き続きこのような広報活動を行っていきたいと考える。

< 関連 URL >

JSPS サマープログラム

<http://www.jsps.go.jp/j-summer/index.html>

2010 年 11 月 5 日フライブルクでの JSPS 事業紹介

http://www.jsps-bonn.de/fileadmin/bonbon_dokei/BonBonDokei30katsu.pdf

<http://www.jsps.go.jp/english/e-quart/35/16.html>



小平センター長による挨拶



山岡係長によるプログラムの説明



クリスティーナ・ツィマーマン氏による体験発表



ジモーネ・ハメラ氏による体験発表



質疑応答の様子



集合写真

(5) ボン大学主催留学フェアに参加

日時: 2011 年 5 月 25 日

場所:ボン大学(ボン市)

5 月 25 日にボン大学にて「留学フェア」が開催され、JSPS の紹介ブースを出展した。当センターからは Schulze 職員、坂本国際協力員が参加した。様々な国から関係機関がブースを出展し、日本からは、ボン大学と協定を締結している早稲田大学と、2010 年度にボンに事務所を設置した筑波大学が参加した。

ブースは「コ」の字型に並んでおり、JSPS を含む日本関係の紹介ブースは、会場に入って左側奥に設置されていた。参加者は思い思いに興味を持ったブースを訪れ、パンフレットを手にし、また、いくつかのブースではお菓子や飲み物を用意していたため、それを手に取りつつ、会場を巡っていた。会場内では学生サークルによる居合道やベリーダンスの披露など、ブース設置以外にも人を呼び込むようなイベントが企画されていた。

午前中は来場者が少なかったものの、一般向けのイベントを午後から並行して開催していたこともあり、午後になるとボン大学の学生の他にも様々な人々が会場を訪れた。JSPS のブースには学生を中心に 30 名程度が訪れ、内 20 名程度は日本への留学、研究に対して強い関心を示していた。訪れた学生の専攻は、日本学とそれ以外とでそれぞれ半数程度ずつであった。特に、すでに具体的に日本に留学することを考えている学生は、パンフレット等を見つつ熱心に質問をしてきた。中には、昨年も JSPS のブースを訪れたという学生もあり、継続的にブースを出展することは、学生たちの留学に対する興味・関心を引き続き喚起する上で、有効であると感じた。

当センターはボン大学の留学フェアには毎年参加し、ブース出展や事業紹介講演をしている。

<関連 URL>

https://www3.uni-bonn.de/unibonn/studium/studium-und-praktikum-im-ausland/veranstaltungsprogramm/copy_of_go-out-studieren-weltweit-die-auslandsmesse



JSPS のブース(左は Schulze 職員)



場内で行われた学生サークルによる居合道の披露

(6) ドイツ大学長会議(HRK)セミナー「学生の多様性を生かすー大学の挑戦」に出席

日時: 2011 年 6 月 1 日

場所:ブリストルホテル(ボン市)

ドイツ大学長会議(HRK)のセミナー“Studentische Vielfalt nutzen – Eine Herausforderung für die Hochschulen – “(「学生の多様性を生かすー大学の挑戦」)に中川副センター長が出席した。これは、HRK が連邦教育研究省(BMBF)の支援を受けて行っているプロジェクト「“nexus”-学修と教育のための構想と良い実践」の一環で開催されたものである。“nexus”は、労働市場において重要性を持つカリキュラムの専門的な統合、修士課程の区分と体制整備、学修や教育における多様性管理、外国で取得した学位・単位の承認の進展、といった分野において良い実践例や構想を大学から集め、公表し、セミナーやワークショップを開いたり、アンケートを実施して専門の出版物を作ったりする取り組みである。このプロジェクトでは、競争的資金により良い実践を行っている大学を支援するということはない。

今回のセミナー「学生の多様性を生かすー大学の挑戦」では、大学はかつてとは異なり、「伝統的な学生」(若くて、独身で、両親が大学卒の家庭出身の学生)と「伝統的ではない学生」(子どもがいたり、職業を持っていたり、両親が移民であったり、という学生)が混在するようになり、学生が入学前に受けてきた教育も多様であることから、そのような状況に大学がどのように対応しているかについて、ドイツとイギリスでの実践例が報告された。

<関連 URL> HRK HP http://www.hrk.de/95_2752.php (英語)

(7) ベルリン日独センター主催シンポジウム「環境と資源の持続可能性および長期的災害対策に関する日独協力」に出席

日時: 2011 年 6 月 24 日

場所:ベルリン日独センター(ベルリン市)

ベルリン日独センター主催((財)地球環境戦略研究機関(IGES)協力)の標記シンポジウムに小平センター長が出席した。本シンポジウムは日独 150 周年名誉総裁でいらっしゃる皇太子殿下もご出席の下に、非公開で開催された。当日のプログラム等、本シンポジウムについては下記 URL に掲載。

ベルリン日独センターHP

http://www.jdzb.de/index.php?option=com_events&task=eventDetails&cat_id=1&Itemid=3&cid=222

(8) アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)年次総会出席

日時: 2011 年 6 月 27 日-28 日

場所:ベルリン自由大学、ESMT(ベルリン市)

フンボルト財団のフェローシップを受けてドイツで研究滞在している 75 ヶ国からの 600 人以上の研究者を集め、クリスティアン・ヴルフ大統領、アンゲラ・メルケル首相の出席の下に、AvH 年次総会が開催された。当センターからは小平センター長夫妻が出席した。

ヴルフ大統領、メルケル首相ともに演説の中で、フンボルト財団が学術外交において果たしている大きな功績を讃え、東日本大震災も引き合いに出しながら、世界中の学術交流の意義を強調した。

この総会は、フェロー同士の交流に焦点が置かれており、総会のプログラムには、ネットワーク形成に対しての革新的な構想を支援する「フンボルト同窓会賞」の授賞式も含まれている。これは、同窓会活動及び研究者交流を促進するための特別支援経費を支給する工夫である。今年は、日本、ロシア、アメリカからの 3 つのプロジェクトが同賞を受賞し、それぞれが 25,000 ユーロの支援を受けることになった。日本で受賞したのは、東日本アレクサンダー・フォン・フンボルト協会と西日本フンボルト会によるプロジェクトである。

総会中に別室にて、「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞」(Philipp Franz von Siebold-Preis)の授賞式も行われ、2011 年度受賞者である香取秀俊 東京大学大学院工学系研究科教授に、ヴルフ大統領より授与された。授賞式には日本側からは、神余隆博 在ドイツ日本国大使と小平センター長夫妻が陪席した。「フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞」は、日本とドイツにおける文化及び社会のよりよい相互理解に貢献し、学問上すぐれた業績をあげた日本人研究者に授与される賞であり、1979 年より毎年 1 名が受賞している。賞金は 5 万ユーロであり、受賞者はドイツにおける 1 年間の研究滞在に招待される。

総会最後の行事となる 28 日の夕食会では、フンボルト財団「研究賞」が活躍中の外国人研究者 23 名に授与された。これは優秀な外国人研究者をドイツの特定の受け入れ研究者のもとへ招へいするためのもので、日本では井上佳久 大阪大学工学研究科教授が受賞した。大勢の参加者が見守る夕食会の席上で同賞の授賞式を行うことは、第一線の研究者である忙しい受賞者のドイツの研究滞在を実現させるための工夫である。

< 関連 URL >

AvH HP <http://www.humboldt-foundation.de/web/press-release-2011-18.html>

東京大学 HP <http://www.ap.t.u-tokyo.ac.jp/news/2011/20110701.html>

2 会議、イベントへの出席、当センターへの来客等一覧

(ゴシック体は「1 2011 年 4～6 月主な活動」に記載したもの)

【4 月】

- 04 月 01 日(金) 坂本真梨子国際協力員が着任
- 04 月 05 日(木) 小平センター長が在デュッセルドルフ総領事公邸を訪問、日独交流 150 周年記念行事についての打ち合わせ(於デュッセルドルフ)
- 04 月 13 日(水) 中川副センター長と Albers 職員がハンブルク大学での「ドイツの大学における日本週間」開幕記念行事に出席(於ハンブルク、～4 月 14 日)…1-(2)①
国際交流基金ケルン日本文化会館 手塚和彰館長が来所

- 04 月 26 日(火) 小平センター長と中川副センター長がチューリヒ大学日本学新講座開設記念
04 月 27 日(水) シンポジウム「Japan Swiss Made」に出席…1-(3)

【5 月】

- 05 月 03 日(火) 中川副センター長、Schulze 職員、坂本国際協力員がヴッパータール大学での
「日本週間」に参加…1-(2)②
05 月 05 日(木) オスナブリュック専門大学からの訪問団を受け入れ…1-(2)③
05 月 06 日(金) JSPS サマープログラム プレオリエンテーション開催…1-(4)
05 月 20 日(水) 第 16 回日独シンポジウム開催(於ベルリン、～5 月 21 日)…1-(1)
05 月 25 日(水) Schulze 職員、坂本国際協力員がボン大学主催留学フェアに参加…1-(5)

【6 月】

- 06 月 01 日(水) 中川副センター長が HRK セミナー「学生の多様性を生かすー大学の挑戦」に
出席…1-(6)
06 月 07 日(火) 小平センター長がアレキサンダー・フォン・フンボルト財団フェローシップ審査会
に出席(於ボン)
中川副センター長、Albers 職員がビーレフェルト大学での「日本週間」に参加
(於ビーレフェルト)…1-(2)④
06 月 09 日(木) 中川副センター長、Schulze 職員がフライブルク大学での「日本週間」に参加
(於フライブルク)…1-(2)⑤
06 月 15 日(水) 小平センター長がボン・ライン・ジーク専門大学開校 15 周年記念式典に出席
(於ボン)
06 月 22 日(水) 中川副センター長、Schulze 職員がケルン大学での「日本週間」に参加(於ケル
ン)…1-(2)⑥
06 月 24 日(金) 小平センター長がベルリン日独センター主催シンポジウム「地球規模という文脈
の中での日独協力ー自然と人類のための安全」に出席(於ベルリン)…1-(7)
06 月 27 日(月) 小平センター長がドイツ大学長会議(HRK)年次総会出席(於ベルリン、～6 月
29 日)…1-(8)
ザールラント大学での「日本週間」に資料参加
06 月 29 日(水) 小平センター長、中川副センター長がハレ大学における「日本週間」に参加
(於ハレ、～6 月 30 日)…1-(2)⑦

その他来所 4 件 8 名

3 2011 年 7 月以降の予定

- 09 月 16 日(金) JSPS ボン研究連絡センター年次活動報告会「JSPS Abend」開催
10 月 21 日(金) 日本の大学及び渡日プログラムの紹介イベント開催(於フランクフルト)



12 月 01 日 (木) 第 8 回日独コロキウム開催 (於ハイデルベルク、～3 日)

4 センター長雑感

東日本大震災と福島原発事故の余波が収まらない一方で、日独修好 150 周年記念事業が目白押しに企画されている。心の整理もやや不十分なまま、次々に行事をこなす。坂本国際協力員も着任早々に近隣大学での行事支援へ。5 月初旬のサマープログラム・オリエンテーションでは、危惧したとおり辞退者が出た。目玉行事のベルリン・日独学術シンポジウムは 5 月 20、21 日に。日独機関が関与する 4-5 種の行事が一部重複するなかを、DFG の協力も得て、センター職員総がかりで何とかやり遂げた。20 日午前のザイボルト賞授賞式では、JSPS としてはとりわけ喜ばしいことに、日独共同大学院事業・名古屋-ミュンスター組の巽・エルカー両代表教授が受賞。その後もドイツ各地の大学での「日本ウィーク」が平均 2 週間に一回は続いていて、その度にセンター職員が JSPS の PR に足を運んでいる。近年最も多忙で、心理的に負担の大きな、四半期ではなかったか。中川副センター長始め、皆さんご苦労様。今年の夏は、ボンでも激しい夕立が多い。

小平桂一 2011.7.1

ぼんぼん時計第 32 号
日本学術振興会ボン研究連絡センター
JSPS Bonn Office
Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)
Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)
Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777
www.jsps-bonn.de